



女芭蕉・永松なみ(三)

恩師、野坡の足跡を遺さんと、俳人仲間働きかけるなみ夫婦

宝暦2年（1752）なみの夫俳人湖白浮風は、恩師野坡の13回忌句集『十三題』の刊行に協力します。編集代表は野坡の高弟の梅従ですが、跋（書物の末尾につける後記）は浮風で、「句は流行語を使って目立とうとしてはいけない。作者の心根が下品であれば駄句になる。野坡先生の教えはこうだ」との内容を書いています。これはもう大坂では浮風が蕉風（芭蕉の俳諧）グループでは、梅従の次の地位にすることを意味します。

同4年、久留米藩（福岡県南西部）で大きな農民一揆がおこります。このとき農民たちをなだめ、藩の課税の重さを半減させたのが、なみの弟の八郎治です。なみが浮風と駆落ちした不倫の責任をとって、なみの父庄屋永松十五郎が隠居したあと、職を継いだのがこの八郎治です。一揆が大きくなると藩はおとりつぶしになります。藩主はほうびを与え、農民たちも課税が安くなったので喜び、彼は面目をほどこしました。

もうひとつ、なみの夫だった庄屋永松万右衛門は後妻をもらい、待望の後継ぎの男子が生まれて大満足、なみのことなどすっかり忘れてしまいました。不義密通のお尋ね者だった浮風となみが、太陽のもとで暮らせるようになったのは、この二つが原因です。

宝暦7年（1757）、野坡の17回忌の句会と追善句集を刊行しようと、浮風となみは計画します。梅従は2年前に没しており、夫婦が中心にならねばなりません。浮風は句集には大坂だけでなく、各地の蕉風の俳人たちに出句してもらおうと計画を立て、旅に出ます。なみは届けられた句を整理したり、あらゆるつてを頼って手紙を出し、少しでも多く集めようとがんばりました。

しかし、野坡没して16年、芭蕉が亡くなってからなら63年も経っています。時代が流れて協力してくれる人は、あまりいませんでした。そんな夫婦を応援したのが額田文下です。文下は浮風となみが出奔し、追手の目をくらまして京へ逃げてきたとき、かくまってくれた書店経営者額田正三郎（俳人・風之）の息子です。父の死亡後、書店を継いでいましたが、浮風の門人になり、京に九十九庵という小さな庵室を与え、編集業務を応援してくれました。

大変な苦労を重ねて出版した17回忌追善句集『窓の春』は、全国の俳人たちに贈られ、誰もがびつくりしました。京坂どころか中国から四国、九州までの野坡とかかわりのあった人たちの句が網羅されていたのです。なお、なみはこのときから雉鳩しよきうという俳号を用いています。雉鳩とは海浜にいる小鳥のミサゴのことですが、中国の伝説によれば鷹たかの妻になるといわれます。つまり、なみは夫の浮風を鷹だと尊敬しているのです。のちに、この漢字は読みにくいので、諸九と当て字にしていますが、彼女の夫を思う気持ち伝わってきます。

ときに、浮風は54歳、芭蕉の享年より4つも年上ですが、『窓の春』がきっかけになって、あちこちの俳人から招待されます。九十九庵の留守番はもちろんなみですが、「あるじの留守をまもりて 待つ日数うれしや暮れてほととぎす 雉鳩」という句があります。あまり体の丈夫でない夫を気づかう、とても優しい句です。

加賀の千代女をご存知ですね。「朝顔につるべとられてもらい水」で知られる女流俳人ですが、あの千代女がなみの人柄を愛し、心をこめた文通をかわしています。金沢の珈涼かまろ（千代女と並ぶ女流俳人）ともそうです。

宝暦8年（1758）旅からかえってきた浮風は、なみにこう相談します。

「もう私の寿命も尽きるだろうから、最後の仕事をしたい。野坡先生の20回忌に、先生の顕彰碑を大坂に建てないか。あちこち歩いて今や先生の業績どころか名前も知らない者が多い。これでは残念だ。寂しすぎる」

野坡の墓は、娘のまさが宝国寺（天王寺区餌差町）に建てていますが、顕彰碑はどこにもありません。なみは大きくうなづきました。

「我に神仏なし。あるは師（野坡）と妻のみ」

このとき浮風はこう書いています。さあ、難事業が始まりました。

落とし水に

誘はれて散る

柳かな

永松なみ



稲田もよく稔り、水も要らぬようになって、落とし水をする季節になったが、それに誘われるように岸辺の柳も散りはじめたと言うのである。落とし水の水音も聞こえて来るような一句です。

※「湖白庵諸九尼全集」（和泉書院）の阿部王樹氏の鑑賞を引用させていただきました。